

米国短期留学プログラム

The Kyoto-DC Global Career Development
Program for International Organizations

2011 年度 実施報告書

京都大学国際交流推進機構

米国短期留学プログラム

The Kyoto-DC Global Career Development
Program for International Organizations

2011 年度 実施報告書

京都大学国際交流推進機構

目 次

I. 米国短期留学プログラム The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations の開設によせて	
森 純一 (京都大学国際交流推進機構長)	1
久能 祐子 (S&R 財団理事長)	2
II. 第一回米国短期留学プログラム The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations の終了にあたって	
村垣 孝 (京都大学同窓会ワシントン支部京大会会長)	4
III. プログラムの概要	
渡部 由紀 (京都大学国際交流推進機構助教)	6
IV. プログラム参加報告	
安東 宇 (経済学研究科 修士2年)	10
谷口 博範 (生命科学研究所 修士1年)	14
生津 路子 (工学研究科 修士1年)	16
安藤 優 (工学部 4回生)	20
白川 達朗 (教育学部 4回生)	23
山中菜奈穂 (経済学部 3回生)	26
V. 国際機関・多文化環境で働く能力について	
Ando, Sakai	29
Taniguchi, Hironori	32
Namazu, Michiko	34
Ando, Yutaka	36
Shirakawa, Tatsuro	38
Yamanaka, Nanaho	41

I. 米国短期留学プログラム The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations の開設 によせて



京都大学国際交流推進機構長 森 純一

京都大学米国短期留学プログラム「The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations」の報告書をお届けします。学生たちの若い感受性と力にあふれた文章を読みますと、還暦を過ぎた私まで心熱くなり、改めて広い世界に飛び出して行きたい衝動に駆られます。

日本は大きな曲がり角に立っています。経済は20年間の長い低迷から抜け出せず、昨年3月の東日本大震災は日本が直面するエネルギー問題の難しさを浮き彫りにしました。政治の世界も褒められた状況ではなく、閉塞感が充満しています。この閉塞感を打ち破り、ふたたび活力ある国を作るには、これまで以上に世界的な規模で考え行動できる人材が必要とされていると言えましょう。

このような認識に立ち、今回のプログラムでは二つの目的を設定しました。一つは、グローバルな視点でキャリア形成を考える多面的な視野を育むこと、もう一つは、地球規模の知識社会に必要な能力とリーダーシップの概念を深めさせることでした。学生たちの報告を読みますと、この二つの目的はともによく達成されたと思います。彼らは与えられた二つの課題に対して、それぞれの解答を導いています。頼もしい限りです。

さて、本プログラムは卒業生と大学の連携による、国際教育プログラムという画期的なものです。立ち上げのきっかけは、大西有三理事からワシントンDCの卒業生が母校を応援したいとの申し出があるので検討して欲しいとの指示があったことでした。昨年3月、USJIのジャパン・ウィークでワシントンDCを訪問した際、ワシントン同窓会の村垣孝会長（京大経63年卒）と同窓会で初めてお目にかかりました。次いで、6月にはワシントンからS&R財団の久能祐子先生（京大工77年卒、工学博士）が来日され、検討を重ねました。プログラム実現に向けて、ワシントンDC、京都双方で多くの方々のご努力を頂きました。プログラムの組成や実施については、ワシントンDCの卒業生の皆様大変にお世話になりました。特にプログラムの詳細まで企画された村垣孝会長、講義とともに財政的なご支援を頂いた久能祐子先生には深く感謝を申し上げます。また京都大学で本プロジェクトを担当して学生を引率し、本報告書の取りまとめをされた渡部由紀先生、事務面を担当した研究国際部の市橋和行G30特定職員、留学生課の皆様にも厚くお礼を申し上げます。

今後、このプログラムが大きく成長し、将来の日本と世界をリードする人材を輩出することを祈っております。



S&R 財団理事長 久能 祐子

(くのう さちこ)

2011年2月25日から12日間にわたり実施された、第一回京都大学米国短期留学プログラム「The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations」が無事終了いたしました。本プログラムの企画、設立に関わられた多くの関係者の方々、特に京都大学国際交流推進機構の森純一教授、プログラムに同行された渡部由紀助教、ワシントン DC 京都大学同窓会の村垣孝会長のご努力に改めてお礼申し上げます。

私個人としても、米国在留の京都大学同窓生として、また2000年に創設したS&R財団の理事長として本プログラムに関わることとなり、若く優秀な学生の皆様と交流する機会を得たことは大きな喜びでした。S&R財団は、私と共同創業者である上野隆司博士（京都大学医学部で勤務経験有り）が設立した501(c)3認定（寄付が税控除される認定）の米国籍のチャリティー財団で、メリーランド州ベセスダに本部を置いています（今年度中にワシントン DC に移転予定です）。S&R財団のミッションは、サイエンスとアートの分野において才能のある若い個人を支援しイノベーションを促進するとともに、個々人の人格的成長を促す、というものです。特に、既存の概念やしきたりに挑戦し新しいパラダイムやビジネスモデルを創出するようなイニシアティブを大事にしています。そのためには、国際的コラボレーション、クロスカルチャー的コラボレーションが必須であるとの考えに基づき、種々のグラントやアワードを通して多くの科学者やアーティストを育成してきました。

この度の、京都大学とのコラボレーションはS&R財団にとっても初めての海外大学とのジョイント事業となりました。日本と米国という社会体制や法体制も異なる国でのプログラム実施で、しかも12日間とは言え完全な合宿生活をしていただくこととなりますので、実施に至るまでには多くのハードルがありました。しかし、京都大学の強力なリーダーシップと全面的なご協力、ワシントン DC 京都大学同窓会の献身的なサポートにより、第一回のパイロットプログラムが成功裏に無事終了しました。心からお礼とお祝いを申し上げます。

今回のプログラムでは10日あまりの短い期間でしたが、6名の参加者の皆さんとは同じ敷地内で生活しました。そして、よく話し、よく食べ、よく飲んで議論もしました。プログラム期間中に開催した同窓会でも多くの同窓生が感想を述べておられますが、「今回参加した学生たちが本当に優秀で明るく前向きであること、人前でも気後れすることなく若者としての本分をわきまえた上で、自分の意見を堂々と話すことが出来ること」に感動すら覚えました。米国で奮闘中の多くの先輩同窓生が、「反対

に勇気付けられた」と感想を話されていました。

個人的なことですが、私と上野は1996年に渡米してバイオテック企業を共同創業しました。多くの方から物心両面での支援を受けて、数万分の1の確率といわれる新規医薬品の開発に成功しました。そして、今は、従業員150人を超す上場会社として着実に成長を続けています。日本の優秀な皆さんが、少しでもこのアメリカや海外の地で新しい自分を発見し、挑戦することの意義や楽しみを感じてもらえたらこれ以上の喜びは有りません。そして、そのような多くの若者たちが、日本の未来を切り開いていくに違いない、と確信しています。皆様の益々のご活躍を心からお祈りしています。

米国ワシントンにて

II. 第一回米国短期留学プログラム The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations の終了にあたって



京都大学同窓会ワシントン支部

京大会会長 村垣 孝

社会、経済のグローバル化が大きく進展している今日、日本が将来にわたって成長し続け世界の中で存在感を示せるかは、われわれ社会が直面する多くの課題を解決に導くためのリーダーシップが国際社会で発揮でき、世界に先駆けてその解決を導きその成果を世界に展開することのできる高度な人材の育成、およびその仕組みを支援する社会にかかっていると思われる。第一回米国短期留学プログラム「The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations」はこの認識を共有し、その一環として企画されたプログラムです。このプログラムの目標は学生たちにグローバル人材として必要な高度な知識、能力、その資質がどのようなものであるかを具体的に把握できる機会を与え、今後の自己キャリアの展開に役立つものを提供することにあります。

大学院などにおいて、高度な知識と能力を持つ優秀な修了者の就職先として国内外のグローバル企業、研究機関、国際機関、NGO などへのキャリア展開が考えられます。ワシントン DC 周辺には世界の政治、経済、科学技術とそれらに関する国々の政策に大きな影響を及ぼす研究機関、NGO、国際機関が存在します。高度な知識、経験、能力を持つ人材を世界から受け入れるこれらの組織はそのことによって素晴らしい業績とその存在感を上げており、現在 40 名ほどのワシントン DC 京大会のメンバーの多くはこれらの機関で活躍しています。S&R 財団による多大な支援とこのワシントン DC 京大会のメンバーの積極的な参加とその関係者の支援によりこのプログラムの実施計画が提案され、京都大学国際交流推進機構によりこのプログラムが実施されました。

プログラムの企画においては、12 日ほどの短期プログラムであることによる時間的制約のなかでいかに目的に沿う効果的なコースデザインができるかが当初の課題でしたが、京都大学当局と当地で活躍する世界銀行、国立衛生研究所 (NIH)、米国宇宙航空局 (NASA)、当地大学などで活躍する京大会の同窓諸氏との検討会で、短期プログラムには知識獲得型の講義方式ではなく、現場での参加体験型のコースが有効な手法の一つとして提案されました。

さらによくありがちなプログラムが満杯で時間に追われ、じっくりと思考する時間的余裕のないプログラムを避け、帰宅後の自己学習、グループ内での自由討論ができる時間と環境を整えることとしました。またこの期に合わせ学生が参加できる京都大学ワシントン DC 京大会を開催して、学生が当地で活躍する京都大学同窓諸氏との対話、彼らのキャリア経験談、アドバイスが聞ける機会を準備することができました。これらの多くはワシントン DC 京大会同窓でもある久能、上野両先生の寛大な

宿泊施設の提供と他の多くの支援により可能になったことを付け加えておきます。

各訪問先でのプログラムについてはグローバル人材に必要な資質を学ぶことができるグローバル人材養成の専門家、組織の幹部による講演への参加、また同時に説明会を通じてその就職情報と就職の可能性を探る機会も同時に準備しました。日本では体得できない国際組織にある異なるものの見方、考え方、行動様式を直接体験できるコース内容でその討論、質疑応答が自由にできる参加型のコースをアレンジしました。

このようにして、京都大学国際交流推進機構、プログラムのスポンサーである S&R 財団、京都大学同窓会ワシントン DC 京大会の協力体制の下で、今年 2012 年 2 月 25 日より 12 日間の短期研修が実施されました。この第一回目はパイロット・プログラムとして実施されましたが、私どもの期間中の観察と学生諸君の帰国後のプログラム報告書からは所期の目的は達成し、その成果が得られたことが明らかになりました。京都大学国際交流推進機構における公正かつ厳正な学生選出プロセスにより、総合評価とタレントの大変高いトップノッチの学生が選抜され、その結果として世界銀行をはじめ、NGO のプログラムの担当者から参加学生に対する高い評価を受けたことをここに記しておきたいです。

最後に、この期間中 S&R 財団、久能、上野両先生の学生諸君に対する毎夕の温かく愛情を持った献身的な指導とモラルサポートには頭が下がる思いでした。また学生に対する責任感あふれた引率と指導を全うしていただきました京都大学国際交流推進機構の渡部先生に心から感謝いたします。学生の皆さまには今回プログラムを通じて築いたネットワークと体験を今後自身のキャリア展開に有効に活用されることを心より願います。

Ⅲ. プログラムの概要

はじめに

2011年2月25日から12日間にわたり、ワシントンDCにおいて米国短期留学プログラム「The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations」を実施した。本プログラムは、本学学生にワシントンDCにある国際機関での研修機会を提供することによって、世界で活躍できるグローバル人材の育成を目ざし、S&R財団と京都大学同窓会・ワシントンDC京大会の支援・協力のもとに2011年度に設立した。その第1期生として、本学とS&R財団¹⁾による選考を経て、大学院生3名（男2名、女1名）、学部生3名（男2名、女1名）が参加した（表1）。

表1：2011年度米国短期留学「The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations」参加者一覧

氏名	所属部局	課程	学年	性別
安東 宇	経済学研究科	修士	2年	男
谷口 博範	生命科学研究科	修士	1年	男
生津 路子	工学研究科	修士	1年	女
安藤 優	工学部	学部	4年	男
白川 達朗	教育学部	学部	4年	男
山中菜奈穂	経済学部	学部	3年	女

プログラムの目的

本プログラムは、将来国際的な活躍を目指す京都大学大学院生及び学部生（3回生以上）を対象とし、国際的な機関や環境で働くということを自らの感覚で理解し考える機会の提供を第一義とする。その目的は、できるだけ多くの「気づき」の機会を提供することにある。本プログラムが期待する学習成果は二つある。一つは、プログラムの研修体験を通じて、グローバルな視点でキャリア形成を考える多面的な視野を育むことである。もう一つは、グローバルな知識基盤社会に必要なコンピテンシーとリーダーシップの概念を深めることである。知識の習得ではなく、視野、姿勢、行動に関するコンピテンシーの向上を期待する。

プログラムのカリキュラム

先述したように、本プログラムの目的は「気づき」の機会提供にある。参加学生ができるだけ多くの「気づき」の機会を得られるよう、世界を舞台に活躍する、異なる専門性とバックグラウンドを持つ多

1) 科学と芸術分野において優れた才能を持ち、日米理解の促進に貢献する若者を支援する目的でワシントンDCに2000年に設立された民間非営利団体で、本学卒業生の久能祐子氏（京大工97年卒、工学博士）が会長を務めている。

様な人々との交流を本プログラムカリキュラムの中心とした。カリキュラムは、(1) 国際機関で働く専門家や研究者との交流、(2) 国際的な起業家との交流、(3) 現地学生との交流、(4) 英語力の強化、の四つの要素から構成した。

(1) 国際機関で働く専門家や研究者との交流

世界銀行、アメリカ航空宇宙局(NASA)、国立衛生研究所(NIH)、Center for Global Development (国際開発のシンクタンク NGO) などの国際機関を訪問し、専門家や研究者による講義やディスカッションセミナーへの参加。

(2) 国際的な起業家との交流

新薬の研究開発から国際的に起業された日本人研究者であり、起業家である上野隆司氏(医学博士、薬学博士)と久能祐子氏(京大工77年卒、工学博士)が創立された Sucampo Pharmaceuticals 株式会社と S&R 財団訪問。

(3) 現地学生との交流

アメリカン大学国際関係学部の学生とグローバル社会におけるキャリア形成についてディスカッション。

(4) 英語力の強化

英語ビジネス・レポート・ライティングの集中講義受講。

(1) と (2) では、国際機関で働くプロフェッショナルや国際的に起業した日本人との交流を通して、国際的に自分が活躍する、または貢献できる場の選択肢とその方法について具体的に考える機会の提供を主目的とした。(3) では、将来のキャリア形成について、米国の同世代の若者との考え方にいかなる類似・相違点があるかを検討する機会となることを期待した。(4) は、世界共通語と認識される英語という道具のスキルアップである。プログラム・スケジュールの詳細は、表2をご参照頂きたい。

「気づき」の効果を高めるために、研修体験を省察し、感じたこと、考えたこと、疑問に思ったことを表現することが重要である。プログラム中は、ほぼ毎晩、参加学生、プログラムの支援者である久能先生、上野先生、プログラムのコーディネーター、また時には京大会のOBの方にもご参加いただき、夕食をともにしながらディスカッションの時間を十分に取った。そして、プログラム終了後の課題として、参加学生に二つの報告書、「プログラム参加報告(日本語)」及び「国際機関・多文化環境で働くための能力(英語)」の提出を求めた。学生の報告書の内容に関しては、本報告書のIV、Vを是非ご一読頂きたい。

最後に、超短期海外留学プログラムのカリキュラム構成について考える上で重要な、参加者のメン

バー構成と海外研修の事前準備について述べておきたい。まず、参加者グループをどう構成するかについては、「気づき」の機会を生むには多様性が不可欠であることを考慮し、参加者の学術分野ができるだけ多様なものになるよう配慮した。今回は6名の学生が参加したが、その学術分野は、文系3名（経済2名、教育1名）、理系3名（工学2名、生命科学1名）であった。

次に海外研修の事前準備については、渡航前オリエンテーションを3回実施した。留学前に必要な情報提供を目的とした「プログラムの参加に関する概要と準備」や「危機管理」のセッションに加え、情報学研究科のDavid Kinny 准教授、Marco Cuturi 准教授の協力を得て、セミナー「グローバル社会でのキャリアを考える」を実施した。このセミナーに備えて、参加学生にはグローバル社会で必要とされるコンピテンシーに関する課題図書を配布した。

表2 プログラム・スケジュール 実施期間：2012年2月25日（土）－3月7日（水）

日付	活動内容
2/25（土）	関西空港出発、ワシントンDC到着
2/26（日）	午前：オリエンテーション 午後：京都大学OBによる歓迎会
2/27（月）	世界銀行訪問 ■講師：Mr. Jeffrey Lewis, Director of Economic Policy and Debt Management ■講師：Mr. Hideki Mori, Manager, Rapid System Prototyping Program
2/28（火）	世界銀行訪問 ■講師：Ms. Jeni Klugman, Director of Gender and Development ■日本人スタッフとの懇談
2/29（水）	午前：国立衛生研究所（National Institute of Health: NIH）訪問 ■講師：小林久隆氏（京大医87年卒、医学博士） 午後：アメリカ航空宇宙局（NASA）訪問 ■講師：濱口健二氏（京大理院01年卒、理学博士）
3/1（木）	午前：S&R Technology Holdings, LLC と Sucampo Pharmaceuticals, Inc. 訪問 ■講師：久能祐子氏（京大工77年卒、工学博士） ■講師：上野隆司氏（医学博士、薬学博士） 午後：アメリカン大学国際関係学部学生との英語によるディスカッション ■講師：足立研幾氏 アメリカン大学准教授（京大法97年卒、博士-国際政治学）
3/2（金）	Center for Global Development（国際開発NGO）訪問 ■講師：Mr. David Roodman, Senior Fellow
3/3（土）・4（日）	自由時間：ワシントンDCの博物館、図書館等見学
3/5（月）	「英語でビジネスレポート作成」の講義受講 プログラム修了ディナー
3/6（火）	ワシントンDC出発
3/7（水）	関西空港到着・解散

2011 年度プログラム実施体制

本プログラムは今回が第一回目であり、パイロット・プログラムとして、京都大学国際交流推進機構、S&R 財団、京都大学同窓会・ワシントン DC の共同体制により実施した。現地でのプログラム・コーディネータは、京都大学同窓会・ワシントン DC 京大会会長の村垣孝氏（京大経 63 年卒）を中心に、岡直人氏（京大工 68 年卒）、上宮新一郎氏（京大工 75 年卒）、小林久隆氏（京大医 87 年卒）、濱口健二氏（京大理院 01 年卒）、足立研幾氏（京大法 97 卒）にご尽力頂いた。

京都大学における実施体制は表 3 の通りである。また、参加学生の選考には、国際交流推進機構の協議員の先生にご協力頂いた。

表 3 京都大学における実施体制

実施責任者	担当教職員
国際交流推進機構長 教授 森 純一	国際交流推進機構 助教 渡部 由紀 研究国際部 特定職員 市橋 和行 研究国際部留学生課企画・管理掛 主任 片山 貴世

おわりに

国境を超え、世界の中で自らの能力を活かす場所を目指した専門家や研究者との交流を主な研修手法とした体験型研修は、参加学生に高く評価された。研修終了 1 週間後に実施したプログラム評価で、プログラム参加者全員の総合評価は「十分満足」であった。参加者に共通したプログラム参加の動機は、「ワシントン DC の国際機関を実際に自分の目で見て話を聞いて、将来のキャリア形成を考える上で参考にすること」であり、彼らの目的に十分に応えられたプログラムであったと言える。また、当初の目的以外にプログラムに参加を通して得たものとして、「京大 OB や参加者である同期生との交流を通して築いたネットワーク」と「それを通じて得られた知的刺激」という回答が多く見られた。京大 OB のワシントン DC での活躍と奮闘について学び、疑問に思っていることを聞く機会を得たことは、現役京大生にとって非常に大きな意味があったことが伺える。

パイロット・プログラムとして第一回目の実施を終え、今後は更なるプログラムの質向上を目指しカリキュラム開発に力を入れていきたい。参加学生に実施したプログラム評価の結果にも耳を傾け、プログラムの目的をより明確にし、国境を越えて活躍の場を目指す京大生にとって魅力的なプログラムへと発展させていきたい。

(文責：京都大学国際交流推進機構 助教 渡部由紀)

IV. プログラム参加報告

Kyoto-DC program に参加して

経済学研究科 修士2年

安東 宇

僕が本プログラムに参加した主たる理由は、キャリアパスとして世界銀行を考えているからでした。また、理系のグローバルキャリアというのは何なのか、文理問わず京都大学の卒業生はいかなるキャリアを辿っているのか、といったことにも興味を持っていました。本プログラムを通して得られた知見を述べるために、また、次年度の応募者のためにも、まず各訪問先に対する印象を述べてみたいと思います。

世界銀行（世銀）

世銀はよく「改革が必要な組織だ」と言われます。今回講師を務めていただいた世銀グループの一組織である多数国間投資保証機関（MIGA）のK氏の言葉を借りると「過剰な自己チェック機能のおかげでスピード感がなくなっている」のだそうです。また、講師のM氏（世銀）や電話で話した国際通貨基金（IMF）のエコノミストによると、同じブレトンウッズ協定で誕生した機関でも、IMFのような軍隊式のトップダウンとは違い、世銀は長期的なプロジェクトを作り上げ



ていくため、時間をかけてボトムアップ方式で考えを集約していくそうです。さらに、今回訪問した別の機関のU氏から教えていただいた「世銀の職員は退職後現役時の9割近い年金をもらっている」という情報からも、世銀が比較的身動きの取りにくい組織であることが伺えます。実際、わずか2日間の日程の中でも、現場のエコノミストと理事会との足並みの不揃いや、世銀内の各部門間の考え方の違いを肌で感じることができました。

とはいうものの、組織単位ではなく、個人単位でみると、仕事に対するモチベーションは高く、精神衛生上健全な環境であることは間違いありません。給与水準が高いことや、同僚の専門分野や経歴が多様で刺激的であることが要因になっていることはもちろんですが、地球上から貧困をなくすという明確な使命感が抱ける職業であることが大きいのだと思います。1万人を超える世銀職員の内、ほんの少数人からしかお話を伺っていませんが、行内のプロジェクト争奪戦は競争的で活気があり、プロフェッショナル集団としての矜持も強いようです。もちろん問題がないわけではなく、足の引っ張り合いや解雇が難しいために起こる不適応職員のたらいまわしも起こってしまうようですが。退職者の

方々が口々に「いろいろあったけど、少しは世の中のお役に立てたのでは」と振り返っている姿がすべてを象徴しているように思います。



アメリカ国立衛生研究所 (NIH)

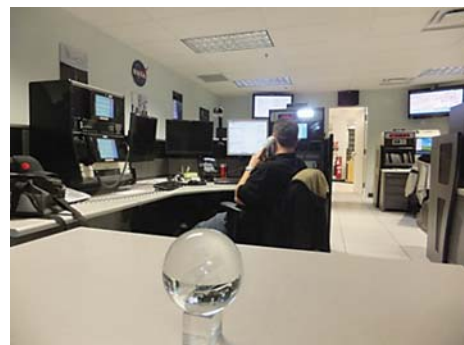
正直、行くまではその存在を知らなかったのですが、今回訪問した機関の中で最も警備が厳重でした。その警備は空港のそれより厳重で、研究の先進性という価値の代償なのだと思います。しかし案外、ここが理系の国際機関の最たるものだ、という印象というよりは、学会でよく見かける研究者の集いのような風景でした。意外だったのが、小林博士に伺った話で、NIHは世界最大の生物学・医学研究所で予算も設備



も魅力的だが、それでもアメリカ国内の民間セクターと比べて圧倒的な優位を築けているわけではない、ということです。ご自身の身の上話を語る際にも、安定的で「ひも」がついていない研究資金の魅力を強調すると同時に、研究の果実を臨床まで届ける手段としての起業を魅力的な選択肢として解説していました。あまり科学者が「科学者」以外のキャリアで目立つことはないように思われる日本に対して、本プログラムの支援者である久能先生や小林先生等の「技術を持った個人」を評価する市場インフラが整っているという点で、アメリカという土地が理系のグローバルキャリアを築くのに適した舞台なのではないか、という考えを持ちました。

アメリカ航空宇宙局 (NASA)

事業ごとに施設を建てましていくのか、新しい施設と古い施設とが混在している広大な敷地にNASAの職員は働いていました。特に印象的だったのが人の少なさです。映画で見えるような満員の管制室は打ち上げなどの時だけで、普段は、50台のパソコンが並ぶ部屋に1人か2人がゆったりと座っており、部屋も節電のためか薄暗くなっていました。今回、たまたま火事が起こったため衛星の組立などを行う無塵室は見られませんでした。働いている人はみな、案内してくれたインド系のイギリス人といい、太陽観



測室の研究者といい、宇宙のことが好きで好きでしようがないと思わせる人ばかりだったのが印象的でした。また、案内を引き受けていただいた同窓会の浜口先生と NASA に勤めるもう一人の講師の女性のプレゼンテーションは NASA の研究・事業の位置づけがはっきりとわかるものであり、そこで働く研究者の明晰さがうかがい知れるものでした。

Sucampo Pharmaceuticals, Inc.

本プログラム支援者の久能先生が運営している組織であり、「バイオテック企業」というものが未知の存在だった僕にとっては、興味をそそる訪問でした。1つの研究成果から得た資金でより大きな研究費が必要な研究に挑んでいくというスタイルの経営で、CFO らとともにリスクをかわしながら新薬開発を進めている旨の説明を受けました。最終目標である中枢神経系の新薬開発を実現するために、現在の資金力で行える研究開発から着手して雪だるま式に資金を増やすことで目標にアプローチする姿にダイナミズムを覚えました。



このプログラムで非常にお世話になった共同経営者の上野先生が、自宅にいらっしゃるときと全く違う雰囲気だったことも印象的でした。プライベートでは、フェラーリの収集からフルーツ・ワイン・茶道・オペラまで、多彩な趣味を持つ温和な「あるじ」、という感じですが、会議室の中心にいるときは具体的な研究内容から経営状態まですべてを把握している貫禄ある宰相、という面持でした。公私の切り替え、趣味の深化、事業の拡大これらすべてがバランスよく取れているように見える人生に対して、若干の憧憬を抱いたことも事実です。

American University (AU)

近くに大使館街があるという地の利からか、国際関係論では全米トップ10に入る大学です。ここで、安達先生のアレンジにより現地の学生とディスカッションをすることができました。これは久能先生からも事前に聞いていたことですが、現地の学生はみな Correct me if I am wrong, but…と いった「けんかしないための枕詞」に配慮していたという点が強く印象に残りました。議論の精密さやアイデアの展開スピードなどの点に関しては大差を感じませんでしたが、議論の形式や進行に関しては彼らを見習い向上させねばならないと感じました。



Center for Global Development (CGD)

アメリカのNGOやシンクタンクはPh.D.を有する研究者が多数在籍するプロ集団であるということを事前に同窓会の村垣会長から伺っていたものの、日本での同様の組織のイメージを引きずっていたため、おしゃれで清潔なオフィスに驚きました。話していただいた講師の方も、今自分がやっている仕事の意義、それを支えている出資者やその仕事に影響する対象を理解した上で胸を張ってお話されていました。日本でいう官庁の審議会や独法を民営化して市場原理に基づいた政策策定をおこなう組織として、自分なりの理解を得ました。

まとめになりますが、このプログラムの前後で目指すキャリアの大枠が変わったというよりは、むしろさまざまなキャリアを歩んでいる人を実際にみることで、より一層自分の目指すキャリアに迷いがなくなった、と感じています。その一方で、キャリアディベロップメントに関する考え方については大きな影響を受けました。特に、一見成功を収めている講師のみなさんも、必ずしも現在の地位を意図的に目指してここまで来たわけではない、という点が新鮮でした。キャリアをディベロップさせる方法は想像以上に多様である、ということを感じられたことが今回の旅で最大の収穫だったと思います。この可能性の大きさをバックに、肩の力を抜いた状態で今後も必要な努力を重ねていきたいと思います。

最後になりましたが、2年前からこのプログラムの企画実施に尽力いただいたワシントン同窓会の村垣会長、久能先生、上野先生、各施設で説明や引率をしていただいた同窓会講師のみなさま、京都大学国際交流推進機構のみなさま、ご寄付をいただいた同窓会のみなさま、他に類をみない貴重なリーダーシッププログラムを提供していただき、心から感謝しています。この場をお借りしてお礼申し上げます。

3月20日



これからの生き方について考えさせられたこと

生命科学研究所 修士1年

谷口 博範

今回、2011年度京都大学米国短期留学プログラムに参加できたことは非常に幸運であり、このプログラムを通して多くの実のある経験をさせていただきました。普段では経験することのできない様々な機会を与えてくれた関係者の皆様に深く感謝します。

このプログラムに参加する前は、自分の将来をうまく思い描くことができず、どのようにすれば満足のいく生き方ができるかを模索していました。色々な可能性があるからこそ、どれを実践するかを躊躇し、結果として自分の納得できる結論を出せず、迷うことが多くありました。

そのような状況の中で、今回のプログラムに参加し様々な人たちの意見を聞くことで、大学の中だけでは気付くことのなかった色々な考え方に触れさせていただきました。その一つがキャリアへの考え方です。今回のプログラムに参加する以前は、キャリアの選択においては失敗は許されないものであるという感覚をぼんやりと持っていました。また、キャリアは描くものであり、その描いたものを如何に実践していくかということがキャリア形成の本質だと考えていました。しかし、実際に様々なキャリアを経て世界を経験している人たちの話を聞いて、必ずしもそうではないことに気付かされました。キャリアを形成していく中で大事なことは、どのようなキャリアを選択したかということ以上に、実際にそのキャリアを通して自分がどのように成長し、何ができるようになり、そして将来の自分にどのようにつながっていくのかということだと教わりました。キャリアとは、自分の目標を実践するために、そして実践することによって形成されるべきものであると感じました。キャリアの選択には、様々な見方ができ、どの選択が最善かを決定することは不可能です。さらに、どの可能性を選んだとしても、その中で成長していくことで、その選択は納得できる選択になります。理想のキャリアを生きることがそもそもの目的ではなく、自分の目標を実践することが大事であり、キャリアはその努力の結果ついてくるものであるということに思い至りました。そういった考えのもとで、自分の選択に対して責任を持ち、努力をすることが大事であるというのを改めて実感しました。

さらに、自分の可能性を選択する際には、自分なりの信念を持つこと、そして自分の状況を客観的に評価した上で、その選択におけるリスクとリターンについて考えることが大事だと教えていただきました。自分の考えている可能性が、選択可能なものなのか、それとも非現実的なものなのかを冷静に判断することは大事です。たとえば、大学で勉強してい



る間はお金について考えることはそれほどありませんでした。幸運にもお金に困って生活できないという状況に陥ることもなく、お金のために目標をあきらめなければならないということも経験しませんでした。今まではぼんやりと、お金のある生活をしたとか、逆に別にお金なんかなくてもいいといった曖昧な考え方を持っていました。しかし、今回社会で働いている人たちと話をすることで、自分の人生に責任を持って選択をしていくためには、一定量のお金というものは必要最低限のものであるということを実感させられました。さらに、社会に出て、必要なお金を自分自身で稼がなくてはならなくなったとき、可能性を選択するときの責任が非常に重くなることを実感しました。今までは、やりたいことをやろうという気持ちばかりが強かったのですが、それだけでは責任のもてる選択することは難しいと感じました。ただ単にやりたいことを追い求めるだけではなく、その選択が自分の将来にどのような影響を与えうるのかを考えることは大切です。そのためにも選択の上では、自分がどのように生きたいのかという信念を持つことが大事だと思いました。信念を持つことで、自分の可能性を伸ばす選択をすることができ、さらに自分の取った選択に自信が持てるようになると思います。また、選択においては、必ずリスクとリターンが伴います。リターンばかりを追い求めて、リスクを省まないということは社会では許されません。自分の取ろうとしている選択に伴うリスクとリターンを考えて、実際に選択可能なものなのかを意識することで、はじめて自分の状況を冷静に判断することができます。自分なりの信念を持ち、自分を客観視することで、目標を達成するために重要な、そして確固たる責任を持てる選択をすることができるのだと気付かされました。

世界の最前線で働いている人たちと話すことで、驚かされたことは他にもあります。その一つが、仕事に対する意識です。今回話した人たちはとても優秀な人ばかりで、多くの刺激を受けました。それぞれの人が、それぞれの違った視点で世界や人生を捉えており、非常に勉強になりました。そしてその中で、多くの人が自分は社会における「駒」であるという意識をしっかりと持っていることに驚かされました。その人たちは、集団の中に置かれた自分の役割を把握し、強みをしっかりと理解した上で、集団の中において個人として何ができるのか、何をすべきなのかという信念をもち、体現していました。自分が社会の中でどのような「駒」であるかを理解することで、自分の視点だけではなく、上司や組織全体さらには世界といった視点で物事を捉えることができます。その結果として、自分の可能性や方向性を見出しやすくなるのかもしれませんが、自分自身とは対話する時間が長いからこそ、自分の考えが特別なものと思いがちですが、自分と離れた立場で自分を観察し、冷静な視点で自分を分析することは非常に大切であると気付かされました。また、自分を世界における一つの「駒」であると考え、自分の存在を客観的に捉えることができ、将来のキャリア形成に関して少し楽観的に考えられるようになったと思います。

キャリアについて色々と考えさせられるのは、理想とそれに対する確固たる保証が欲しいからだだと思います。確固たる保証があれば、将来に対して不安を抱くこともなく、選択を



迫られることもなく、目の前のことだけに集中することができるかもしれません。逆に色々な可能性が広がっているからこそ、悩んで、わくわくして、そして時に不安になってしまうのだと思います。その不確実性を、楽しみととるか不安ととるかは、そのときの状況によると実感しました。世界の最前線で働いている人たちは、少なくとも僕には、皆楽しそうに仕事に向き合っているように見えました。今回のプログラムを通して、自分もそのように楽しむ姿勢で将来自分のできることに向き合っていこうと考えられるようになりました。心に残っている言葉は、「自分の人生なのだから、人に迷惑をかけなければ自分の時間を使って好きなことをすればいい」というものです。実際にその考えを行動に移し、苦しさを見せず、楽しそうにしている姿を目の当たりにすると、心を打たれる言葉でした。

今回、プログラムを通して、会話する機会のあった人たちは、どの人たちもすばらしい人たちでした。どの人も、自分たちの人生の中で語るべきものを数多く持っており、またそれぞれが非常に示唆に富んだものでした。このような人たちと会話することで、自分自身もいつかそのような話をできる人になりたいと思うようになりました。今回のプログラムで学んだことを、ただの知識としてではなく、自分の中でしっかり消化して自分なりの考え方として構築していこうと思います。これからもいろいろな経験を重ねていき、そのたびに新たなことに気づかされて、新しい考え方を身につけていくことになると思います。そして成長していく上で、自分が過去に持っていた考えと矛盾した考え方に至ることもあると思います。しかし、そのような考え方の転換すらも楽しめるようにこれから努力していきたいと考えています。

最後に、今回このような機会を与えてくれた皆様そしてその機会をすばらしいものにしてくれた皆様に心より感謝するとともに、このように示唆に富んだ影響を与えてくれるすばらしい機会が多くなり、そしてそのような影響を受けることでさらに周りに影響を与えることのできる人が多くなって欲しいと思います。

プログラムで学んだこと、そして将来のキャリアについて

工学研究科 修士1年

生津 路子

はじめに

Kyoto-DC プログラムを通して、私の将来のキャリアに対する考え方は大きく変わりました。プログラムへの参加前から考えていた進路自体は変わりませんでしたが、様々な人と出会い、たくさんの職場を訪ね、自分の考え方や生き方次第で今までよりずっと幅広い選択肢のある世界で生きていけることに気が付きました。この意識の変化は、私がこれから様々な選択をするとき、大きな違いを生むと

確信しています。

プログラムへの参加動機

現在私は大学院で温室効果ガス削減を行う場合の経済影響について、アジア地域を中心にシミュレーションを行っています。高校生の頃から人間と環境が共存できる社会実現に少しでも関わりたいと思っており、今の研究は研究したいと思っていたことにとても近く、日々充実した生活を送っています。また、私は小さいころから海外に憧れを抱いていて、いつかは世界を仕事のフィールドにしたいと考えていました。この思いは大学3年の時に経験したカナダへの交換留学で一層強まりました。日本にいと、日本で教育を受け、日本で職を探し、日本で生きていくことが当たり前と考えがちです。実際、私の同級生の多くは今就職活動中で、皆日本の企業、もしくは外資系企業の日本支社への就職を考えています。私もそれが当たり前だと思っていましたが、カナダへ留学し自分の生きていく場所を世界中から見つけ出そうとする友達と知り合っ、当たり前のように日本で過ごす生き方に疑問を持つようになりました。彼らのように自由に生きてみたいと思うようになり、修士課程卒業後は海外の大学院で博士課程への進学を考えるようになりました。しかしながら、海外進学を選ぶ日本人はまだ少なく、また、日本の大学における博士課程のカリキュラムが決して劣っているわけではありません。興味はあるが踏み出せず、決断を先延ばしにしながら修士の一年間が終わろうとしていました。そんな中、本プログラムへの参加が決まり、私はプログラムを通して、自分の将来についてきちんと向き合い、進路を決めようと思っていました。

様々な機関を訪問して

プログラムを通して、私たちは普段は決して入れないような場所やお会いできないだろう人にたくさん会い、多くのことを学びました。

特に世界銀行では、働く方たちの優秀さに強く刺激を受けました。バイリンガルやトリリンガルであることは当たり前であり、それがクリアできなければスタートラインにさえ立たせてもらえず、さらにマネジメント力や専門性といった多くのスキルが求められる。世界銀行で働くことがどんなに競争的であるか教えられ、自分がぼんやりと描いていた、国際機関で働くことの大変さを思い知りました。世界銀行でお会いした方はどなたも多忙なスケジュールにも関わらずたくさんの質問に答えてくれ、世界銀行で行っている業務に誇りを持っていることも強く感じました。

また、今回のプログラムで訪れた NGO、Center for Global Development でお会いした方のキャリアパス（ハーバード大学で数学の博士号を取り、その後この NGO で働き始めた）も非常に興味深く感じました。私は彼に、なぜ大学や研究所ではなく NGO を選んだのかと聞かずにはいられませんでした。私にとって、博士号取得後に NGO で、しかも専門を変えて働くことは考えてもみないことだったからです。彼は、大学や研究所は論文を書くために研究をするけれども、NGO ならより現実社会に近いところで研究ができるから、と答えてくれました。日本とアメリカの NGO の位置づけが違い、また、今

回訪問した NGO がとても有名な機関だったからかもしれませんが、博士号を取ってからのキャリアにも様々な道があることを実感しました。日本では博士号を取ることでキャリア選択の幅が狭まるとさえ言われることがあり、それが博士課程へ進むかどうかを悩ませる原因にもなっていると聞きます。アメリカでは博士号取得者にも様々な道と活躍の場があることを知り、より海外で勉強したいという気持ちが強くなりました。



上野先生、久能先生から学んだこと

今回のプログラムでは訪問した機関や会社で学んだことももちろんたくさんありましたが、本プログラムを支援して下さった上野先生、久能先生とのお話から学んだことも、自分のキャリアに大きな影響力を持つと思います。お二人は毎日のように私たちが宿泊していた家に来てくださり、一緒に食事をしながらたくさんのお話を教えて下さいました。プログラムを通して私たちが感じた疑問や、私たちが抱えている将来への不安について一緒に考えて、アドバイスして下さいました。10日間のプログラムでお二人から学んだことはたくさんありますが、その中でも私の心に残ったアドバイスを3つ挙げてみます。

まず、キャリアは積み上げるのではなく、たくさんのお話がジグソーパズルのピースのように組み合わせられて、広がっていくこと。これを教えていただいたとき、私は肩の荷が下りたような気持ちになりました。いつも失敗することを怖がって先へ進まずにいた自分に、キャリアは塔のようにどこかで失敗したらすべて崩れてしまうようなものでないことを気づかせてくれました。まっすぐの道を進まなくても、自分がやりたいことをしっかり心に置いておけば、いつか自分だけのジグソーパズルの絵ができるのだと思います。いつか自分が進んできた道を振り返って、誰にも負けなくらい美しく素敵なジグソーパズルの絵が完成していたらいいと思いました。

次に、自分が頑張らずに他人より抜き出していることを探すこと。自分の弱点を埋めるのではなく、よい部分を伸ばして、自分が一番生かせる“スキマ”を社会の中に見つけること。自分の欠点にばかり目が行きがちですが、欠点を伸ばして人並みにしても世界で戦うことはできません。自分の優れている点を伸ばすことこそ、世界で活躍するために必要であることは、上野先生や久能先生が今まで実際に感じ、実践してきたことなのだと思います。私にはまだ自分が一番生かせる“スキマ”がどこにあるのかわかりませんが、いつかきっと見つけ出したいと思います。

最後に、最悪のケースを確認して、あとは最高のケースだけ見て進むこと。壁に当たるまで、まずは進んでみる。これは、私が自分の将来のキャリアについて相談をしているときに上野先生や久能先生がおっしゃって下さった言葉です。リスクを取らなければリターンもない。リスクを取るときには最悪のケースを想定して、それが許容可能なレベルであれば、あとは自分ができることをすれ

ばいい。この言葉は、ずっと自分の選択に自信が持てなかった私の背中を強く押してくれました。

将来のキャリア

本プログラムを通して、自分の将来についてたくさん考え、多くのことを学びました。参加前は自分の将来のキャリアを考えつつも、決断と実行ができずにいました。このプログラムを通して、将来の選択肢は自分が考えていたよりたくさんあり、また、自分であらかじめすべて決めることなど無理なのだと気付きました。今までずっとどこか想像のつくキャリアを、失敗の少ない道を進んできましたが、これから自分が国際的な場で活躍したいと思うならば、まずはリスクを取り、挑戦することが必要なのだと思います。挑戦をして壁に当たってから、自分が進むべき道は本当にその道なのか、自分が一番生かせる道なのかを考えればいいのだと思います。今まで進んできた道とは違い、その先が見えないことに正直不安を感じます。でもそれと同時に、自分の将来が想像していたより実はずっと広いことに気づき、わくわくした気持ちも感じています。

最後に

本プログラムの実現にあたってたくさんの方から様々な面でサポートをいただきました。このような素晴らしい機会を与えていただき、心から感謝しています。このプログラムで学んだことをぜひ自分の将来に生かし、本プログラムの一期生としてその期待を忘れないよう、また、いつかこのプログラムをサポートする側として帰ってこられるよう前に進んでいこうと思います。



The Kyoto-DC Program の参加体験と将来のキャリアについて

工学部 4 回生

安藤 優

そもそも僕が Kyoto-DC Program に応募した理由には大きく 2 つあります。1 つは多様な職業選択肢を得たいと思ったからです。僕は現在工学部 4 回生ですが、3 回生の時に就職活動を経験しました。当時の僕は研究者になることに違和感を抱き、京大工学部では大多数の人が大学院に進学する中、民間企業に就職しようと試みました。ところが、自己分析や企業分析を重ねるにつれ、無意識のうちに自らのキャリアを大学院に進学し研究者になるか、民間企業に就職するという 2 つの選択肢に制限していることに気がつきました。もっと多様な選択肢をもちたい、そのためにはもっと多くの経験を積む必要があると考え、結果的に就職活動を断念しました。もう 1 つは海外で働くことに興味があったからです。初めて海外旅行をしたときに現地の人との交流で、日本では当たり前であることが海外ではそうではなかったことに驚かされました。異なる文化的背景をもつ人々との交わりに非常に刺激を受け、世界へと飛び出して行くことが自分の新しい可能性の扉を開けてくれるのではないかと期待しました。ますますグローバル化が進む今日において、また広い視野をもちたいと思っている自分にとって国内にとどまることに無理があることも、国際的環境で働くことに興味を抱いた理由の一つであると思います。したがって、自らのキャリアを考えるに当たり多様な選択肢をもちたいと願い、海外で働くことに興味がある自分にとってワシントン D.C. にある国際機関を訪問し職員の方と話す機会を得ることができる今回のプログラムはまさに絶好の機会であったのです。

プログラムは主に以下の内容で構成されていました。プログラムのオリエンテーションの日には D.C. 近郊で働くたくさんの OB の方とお会いしました。今回のプログラムで初めて知ったことですが、プログラムの実現にご尽力いただいた元世界銀行職員の村垣さんが会長を務める京大同窓会・ワシントン D.C. 支部があり、オリエンテーションでお会いした OB の方はワシントン在住の同窓生にあたります。京大生は、一匹狼で京大生同士では集まらない印象が強かったので同窓会の存在に同じ京大生として少し嬉しくなり、一度にたくさんの OB と会うことは貴重な経験でした。プログラムのメインである国際機関の訪問では世界銀行、NIH（国立衛生研究所）、NASA（アメリカ航空宇宙局）、NGO を実際に訪れ業務を担当している職員の方の話を聞き、質疑応答をしました。今回のプログラムに資金や施設面で多くの支援をしていただいた久能博士が CEO を努める S&R Technology Holdings に伺い、アメリカでの起業・経営についてレクチャーしていただきました。また American University の学生とキャリアディベロップメントについてディスカッションを行いました。

今回のプログラムは人との出会いの連続でした。たくさんの方から伺ったキャリアバックグラウンドの話は人によって様々でまさに十人十色でした。将来のキャリア選択に強い興味を持っていたの

で、この話は自分のキャリアについて考え見つめ直すには大変有用でした。とりわけ僕には、ある京大OBでワシントンD.C.内の大学のロースクールに派遣されている弁護士の方の話が印象に残りました。この方は農学研究科を卒業された後に独学で法律を学び、司法試験に合格されたそうです。農学と云ったら理系で、しかも大学院まで卒業したら卒業後の進路はメーカーや研究者というのが当たり前のイメージで



したので、弁護士という選択は非常に驚きでした。僕も工学専攻だからと云って進路は製造業と決めつけたくはなかったので、自分の専攻にとらわれない柔軟な進路の選択は参考になりました。そもそも、自分の専攻に関係した仕事に就く決まりなどなければ、卒業後に就職しなければならない決まりなどないのです。僕たちは知らず知らずのうちに自らのキャリアに勝手に限界を定めてしまっていたことに気づきました。自分の心の声に耳を傾ける勇気を持つことと、実現に向けて努力することの大切さを学びました。

NIH、NASAの研究員および久能先生にはアメリカ特有の労働意識、企業文化を学ぶことができました。まず、アメリカの企業や機関では人材の流動性があるということ。流動性という、成果を残せないと簡単にクビにされてしまう厳しい世界という印象をもっていました。しかし単に実力主義の厳しい世界という言葉だけでアメリカの企業文化を言い表すことはできません。例えば研究職に関しては、確かに、ある一定期間ごとに研究内容を含めた、研究室に対して審査が行われ、その内容次第では予算が減らされたり、場合によっては研究室が閉鎖されるということもありうる厳しい世界であることは間違いありません。しかし一方で、研究者の側にもそもそも同じ研究所にとどまろうと考えている人はあまりおらず、数年後に起業したり、別の研究所や大学に移ろうと考えている人が多いということがわかりました。日本では一度仕事に就いたら環境や待遇に不満があってもよほどひどくならない限り転職を考慮することはない傾向にあります。アメリカではそもそも自分の目標が現在のポジションで達成されるとは思っておらず、ステップの一つに過ぎないと考えているようです。このように日本では新卒入社時の入り口と退職時の出口でしか活発な人材の移動が行われず各機関、企業間で人材の移動がなく閉鎖的であるのに対して、アメリカでは入り口と出口だけでなくその間でも同じように活発な移動があることが組織に新しい風をとり入れることになり、このことがアメリカが優れたイノベーションを生み出している理由の一つであると思いました。また、民間企業に関しては、社員は企業に雇われているという日本のイメージに対して、企業と社員は対等な立場であるという印象を受けました。社員は自分の仕事や待遇に関して積極的に経営者と話し、受け入れられなければ会社を辞め経営者もそれを止めることはしないそうです。辞めると言った社員をまずは止めようとする光景に慣れてしまった僕には一見、あまりに無慈悲ではないかと思ってしまうのですが、本人のモチベーションが上がらない環境で働いてもらうよりも納得のいく環境で働く方が成長につながり人生をもっと有意義なものにできる、一人の社員の人生を尊重しその人生に口を出す資格は企業にはないという、



むしろ日本よりも温かい経営者の意識を見出すことができました。と同時にアメリカの労働環境の方が日本と比べて合理的であると思いました。アメリカでは、社員がやる気の無い状態で働くことになり会社への貢献度が低下し、結果的に社員のためにも企業のためにもならない事態がなくなるからです。このように働く国が違えば働くことに対する考え方が大きく異なるということを事前に知ることができたのは

とてもよいことでした。

世界銀行の職員の方からは絶対的な自信と、他者を惹きつける人柄を学びました。この社員の方は、現在自分が担当している分野では誰にも負けないと言っていました。特に世界銀行のように世界中から抜群に優秀な人が集まってくるところで自分が一番と言えるのはすごいことです。その話しぶりからもものすごい自信を感じました。と同時にその自信を支えるだけの猛烈な努力をしてきたことが伝わってきました。誰にも負けないことが今の自分にあるかというとはっきりいってありません。熱意や根性があればなんとかなるという考えもありますが、真のプロフェッショナルになるには相当量の知識が必要だという厳しい現実を突きつけられた気がしました。会社に入っても、全く新しいことを1から勉強しなければならない場合があるでしょう。その大変さにくじけそうになることもあるかもしれないが、それを乗り越えたとこの職員の方のように誇りをもって自分の仕事について語るができるようになるのかもしれませんが。また、工学専攻の僕にとってこの方の担当業務はまったく未知の領域で決して自分から進んで勉強したり調べてみようと思えるような分野ではありませんでしたが、そんな僕でも思わず話に引き込まれてしまう人柄や魅力がありました。特に多文化的環境では人の意見を聞くことも大事ですが、自分の意見を聞いてもらうことも重要です。そしてそのためにはこの人の話を聞いてみたいと思わせたり、つい話に聞き入ってしまう魅力が必要だと思いました。

この他にも例えば食事のときのような何気ない会話で多くの人の等身大の意見を聞くことができ、自分がこれまでいかに狭い視野でキャリアを見つけ出そうとしていたことに気づきました。普段生活しているときには、何らかの力が働かない限り、人間というものは自分の興味にしたがって物事を判断してしまい、結果的に歪んだ価値観を築きあげてしまいます。今回のプログラムで、国際機関の職員の方との対話はもちろん、自分からは決して挑戦しようとしなかったお茶や音楽を経験させていただいたことで自分自身の価値観を見直すきっかけを得ることができました。より広い視野で考えれば選択肢の数も増え、それだけ目指す自分の姿を実現する可能性も高くなるはずです。プログラムに参加する前は自らのキャリアを「～になりたい、～で働きたいからそのために何をすべきか」と考えていましたが、参加後には「自分は何を



したいのか、それが実現できる仕事とは何か」と考えることができるようになりました。前者の考え
方では、もし希望した場所で働くことができなかつたときに、それまでそこで働くことを目指して頑
張ってきただけに落ち込んでしまい、次の新しい一歩を踏み出す気持ちの切り替えができないかもし
れません。しかし、自分の中に確固とした揺らぎのない軸をもつことができれば、例え働く環境が変
わっても改めて自分の軸を見つめ直せば再び立ち上がり目標を追求できるはずです。最後に、仕事は
人生の大部分の時間を占めることになるので、周囲の意見や一時の感情に流されずに決断することが
重要であり、自分次第でいくらかでも選ぶことができるという、その決断の自由が与えられているあり
がたさを改めて認識する必要性を感じました。

国際機関を目指したキャリア設計

教育学部 4 回生

白川 達朗

今回が第一回目となる本プログラムを通じて、国際機関で働くということに対して改めて現実的に
考えることが出来る良いきっかけを得たように思います。小さいころから将来は国際機関で働きたい
と思っていたのですが、実際にどのような機関でどういったことがしたいのかという現実的なビジョ
ンを描いているわけではありませんでした。何となしに、お金のためでなく広く人々の益のために働
きたいなと思っていたのです。おそらく、今回、本プログラムに参加した他の五人の学生や、各機関
で講師をして下さった京都大学卒業生の方々もどこかで似たような考えを持っていたのではないかと
思います。同じような考えを持った志の高い京都大学の学生に来年以降も参加して頂けたら幸いです。

私自身、将来的には国際機関で働いてみたいと書きましたが、国際機関といってもその幅は広く多
分野に渡るということは重々承知していました。国際連合ひとつをとっていても政治や外交の仕事に
近いものから平和維持活動や農業関連分野までと、これを国際連合と一括りにひとつの機関と捉える
のも憚られるほどです。政治・経済・教育・医療・農業・工業とあらゆる分野のエキスパート達がそ
れぞれの機関を構成しています。それだけに、自分が望み向かっていけば必ず自分の能力を活かすこ
との出来る場所であると思います。今回の最初の訪問先である世界銀行でも、経済系の人間だけが働
いているものだとばかり思っていたのですが、実際は内部に細分化された部署があり、その仕事内容
は多岐に渡るものだと知りました。国際機関についての自分の理解がいかにも不足していたのか思い知
らされたと同時に、さらに魅力を感じるようにもなりました。

現在私は教育学部で、比較教育や教育社会学を学んでいるのですが、それが直接将来の仕事に結び
つくかどうかは分かりません。もしかしたら、政治や経済の分野に転向する可能性もあるでしょうし、

医療や公衆衛生に従事することも十分に可能だと思います。まだまだ将来を見据えた明確なビジョンを持ってはいませんが、自分の可能性を狭めるような考え方は極力避けようと思っています。これだけ大きな国際機関の中には、どこかに必ず自分の能力を活かすことの出来る場所があるはずです。

今回のプログラムでは、実際に国際機関で働いた経験のある京都大学卒業生、並びに現役の職員の方々がどのような志を持って、またどのような経緯で国際機関で働いているのかを直接聴いてみる、ということを経験の目的として参加したのですが、たいへん多くの現役職員やリタイアされた方から貴重なお話やアドバイスを受けることが出来ました。

まず、職員の方々が一様に言われていたことなのですが、国際機関で働こうというのを目標にしてそこに向かっていたわけではないということです。これは私にとって非常に驚きでした。国際機関で働くなると、相当の覚悟や能力がないとできないものと思っていたので、多くの職員がその道を目指して長い間努力してきたものだと信じていたからです。しかし、実際は大学を出て、一般企業でしかも現在の仕事とは結びつきそうもないことをしていた方や、大学院に進学した方など、進路はまちまちでした。大学院に進学した方でも、その時点では、将来的に国際機関で働くことなんて考えていなかったという人たちが殆どでした。商社で働いていた人や、運輸業界に進んだ人などもいました。そのような多様なバックグラウンドを持った方々の多くは、気づいたら今の職場（世界銀行、IFC（国際金融公社）、IMF（国際通貨基金）、NASA（アメリカ航空宇宙局）等）に来ることになったとおっしゃっていました。また、国際機関に入るために自分のスキルを高める必要はなくて、それは間違った考え方だと多くの方が言っていました。例えば、世界銀行で働きたいから経済系の博士号を取得して、というのではなく、自分のやりたいことを突き詰めていった上で、自分の能力を最大限活かすことのできる機関を見つければよいのだと言う事です。以前にも国際連合に勤める方から全く同じような考えを聞いたことがあったので、やはりこれは非常に重要なことなのだと再認識しました。

今まで、大学を出て最短距離で国際機関で活躍することを思い描いていたので、必ずしもそうではないキャリア設計を再認識することとなりました。また今回、本プログラムを全面的に支援して下さったスポンサーの久能先生がおっしゃっていたことですが、キャリアは積み木のように上に重ねていくようなものではなく、ジグソーパズルのようなもので、中心を埋めていても、時に端っこを埋めに行っても良いのではということでした。必ずしもひとつの機関や職場に居続けるのではなく、いろいろな経験をした上で、いつか国際機関で活躍できる人間になればいいのだということ、そして国際機関から別の仕事に移るのもありだということが聞けて、少し肩の荷が下りたような思いがしました。もう一点、久能先生が何度も口にしていた、ワーストケースを考える、ということも今まで自分が意識していない点でした。ワーストケースすなわち、自分にとって最悪のシナリオを考えて、そうなってしまった場合でもまだ自分が食べていけるのならば大丈夫、後は全力でベストケースに向かっていけば良い、というものでした。自分のキャリアコースを考える上で最も難しいことはなんですか？今の自分にとってはまだまだ、明確なキャリアコース自体が見えていないのかもしれませんが、しかしながらこれから自分の将来について、またキャリア設計をしていくうえで、この久能先生の考え

は非常に有用なように思えます。

周りの同回生の学生が就職活動に向けて心血を注いでいるのを見てると、大きなプレッシャーを感じることもあります。しかし、多くの学生がまだ本当に自分のやりたいことが見つけられていないのではないのでしょうか。少なくとも近しい友人達と話をしていると、仕事を選ぶような身分ではない、自分がやりたいことなんて二の次だという人が多いように感じます。不況、就職氷河期といわれる中では自分の思ったように事が進まないことがあるかもしれません。いや、思い通りに行くことのほうが少ないでしょう。今回、話を伺った京大卒業生の方の中には、本当に自分がやりたいことが何なのか分かるまで大変時間が掛かった、多くの人が同じように時間をかけて自分のやりたいことを模索するのであり、中には一生かかってもそれが見つけられない人もいる、と語ってくれる人もいました。久能先生の言っていたジグソーパズルの喩えのように、いろんなところに手を伸ばしてみるのも良いかも知れない、とその方はおっしゃっていました。

今回このプログラムに参加することで、同世代の志の高い学生の話が聞けたことも、自分にとって有益なものとなりました。普段だったら話すこともないような話題について真剣に考えてみたり、将来のこと、またキャリアディベロップメントについて皆同様に悩んでいるということ、自分の考えがいかにか凝り固まっていたことがよく分かりました。今後は、大学院に進学して国際機関を目指すつもりでしたが、まず社会に出て働いてみるのも良いかなと思うようになりました。前述したとおり、現在勉強している教育学が、将来の職業と必ずしも結びつく必要はないのだと思うようになりました。キャリアは積み上げていくものではなく、ジグソーパズルのようなものですから。

最後に、今回の The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations をサポートしてくださった、京都大学ワシントン同窓会の方々、S&R 財団の久能先生・上野先生、引率の渡部先生並びに関係者すべての方々に感謝いたします。来年度以降も本プログラムがより一層発展することを期待します。



世界銀行入り口にて

自分にしかできない方法で世界に貢献したい

経済学部 4回生

山中 菜奈穂

私は幼い頃から、将来は自分独自の研究や仕事を通して国境を越えて人の生活水準の変化に貢献できればと思っており、職場の対象が世界の大部分を占める途上国でダイナミックに開発に携われる国際連合や世界銀行（以下世銀）などの国際機関は、子供時代より憧れの進路としてありました。

しかし憧れの対象でしかなかった国際機関も、大学に入り開発経済学を学び、自身の進路の選択肢として捉えられるようになってくると、自分がそのような機関に「所属する」ことよりも、そこで「自分にしかできない仕事をする」ためにはどのようなキャリアを積まないといけないのだろう、と考えるようになりました。



そのような時期に国際機関の中でも競争が非常に激しく、かなりの専門性が必要とされる世銀やNASAなどでキャリアを積んでおられる職員、さらに米国で大活躍されていたりしゃる企業家、研究者の方々のお話を聞ける本プログラムに出会えたことは、本当に恵まれていたと思います。プログラムを通して、「自分にしかできない方法で」開発という分野において仕事をするためにはどのようなキャリアをたどるべきか、様々なヒントを得ることが出来ました。以下、それらについてワシントン D.C.での体験も交え、振り返りたいと思います。

まず、このプログラムを通して一番意識させられたのが、自分の専門分野における絶対的な競争力を持つことが如何に大事かということでした。世銀、NASA、開発指標の作成などに取り組む NGO の Center for Global Development などワシントン D.C.の様々な機関では、修士号はもちろん、博士号の取得や各々の分野における職歴を経て本当に名実ともに専門性のある人のみが残りに、そうでない人は淘汰されてしまうように見えました。例えば世銀では日本のような終身雇用の考え方は一切なく、機関が必要とする仕事にマッチする能力を自分が持っていれば採用され、契約後も機関に残ろうと思えば、相手に自分を売り込む努力を繰り返さないといけません。幹部候補の選考に携わったこともある職員の方は、受験者にはまず“What can you do for us?”という質問を投げかけるとおっしゃっていました。このように、自分の価値は、職場で如何に役立つかというパラメータのみで測られ、どれだけ学歴が高かろうと地位が高かろうと関係なく、X線に透かされ中身で判断されるのだと思いました。そこで生き残り、自分独自の研究を行って成果を出していくためには、やはり専門分野における中身の濃い訓練を積む必要があると実感しました。

プログラムを通して私たちをサポートして頂いた本プログラム支援者の S&R Foundations、さらに Sucampo Pharmaceuticals の代表を務めていらっしゃる久能先生と上野先生のお言葉で、「努力しなくてもできることを見つければいい」「人のやっていないことをやればいい」というものが非常に印象に残っています。米国の厳しい競争に晒されてきたお二人は、まさにご自身の専門分野や得意とする分野を築かれ、競争の中で成功された例だと思えます。

まだ学部3年生で自分の進みたいフィールドしか見えていない時点では、専門性や自分の得意分野のようなものも無く、ブリーフィングを受けるたびに圧倒されるばかりでしたが、今後自分の専門性を考えていく上で、プログラムからふたつの教訓を得ました。まず、「自分の分野を選べば、仕事の半分以上はもう終わっている」というくらい、自分の能力に適した専門を選ぶことが大切だということ。また、一度分野を選んでしまえば、後は中身にとことんこだわって、地道に目下のプロフェッションを見つめ、訓練を積むべきだということ。さらに自分の価値観や専門を軸にキャリアを積みたいのであれば、前述した専門性に加え、キャリアに関する捉え方の柔軟性も不可欠だと強く思いました。ワシントン D.C. で訪問させて頂いたような国際機関では組織間での職員の流動性が非常に大きく、職場については複数あるオプションの中、その時々で一番良い組織や分野を選択し、移れるような柔軟性が必要です。その際は自分にとって必要な訓練が何かを理解した上で、場合によっては民間で働くなど、アプローチについても柔軟に考える必要があります。

また、こういった組織や分野をまたがる職歴は単純に組織形態故の必然性から生じるというものでもなく、自分の専門を追及する目的であれば高く評価される、ということも学びました。実際世銀職員や Center for Global Development の職員を見ると、研究所から民間、パブリックセクターなど様々な機関で前職を持たれていた方がいらっしゃいました。Center for Global Development に訪問した際に、職員同士で当たり前のように、「次はどんな仕事に移るの?」といったやり取りが行われているのが象徴的に思われました。



私は比較的パブリックマインドなので公的機関を志望していましたが、パブリックとプライベートを行き来することで得られるものも大きいと感じました。例えば長年投資銀行に勤められた後、世銀に移られた方は、世銀のオペレーションの効率化について民間の視点から、非常に有意義なアドバイスをされていたと思います。また、プログラム支援者の上野博士が代表でいらっしゃるバイオベンチャーの Sucampo Pharmaceuticals で薬の研究開発の投資額を決定するプロセスについてお聞きした際は、その過程が開発途上国の開発プロジェクト融資の配分決定にも生かせる部分が多くあると気づきました。今では自分のキャリア選択の際も、専門を様々なアプローチから役立てられるように、組織や方法について柔軟に考えようと思っています。

そして最後に、日本企業の「新卒」制度のような雇用形態が無く、決まった入口の存在しない国際機

関で自分の専門分野に該当する部署 / 仕事を見つけて働くにはコネクションが非常に重要になることを、プログラムを通して痛感しました。世銀の例を挙げると、公募の限られたポストを除けば、就職という観点から見れば、世銀は近寄りやすい機関に思えます。ただし自分のフィールドでアンテナを張っておき、専門分野のコミュニティが自分のことを認めてくれていれば、それによって自分を引っ張り上げてもらえるということが十分にあるのだと、何人かの方とのブリーフィングの中で思いました。

中にははっきりと「コネで入りました」とおっしゃる職員の方もいらっしゃいましたが、国際機関職員のコミュニティにおいてコネクションは全くネガティブな意味合いは無く、むしろ逆のように捉えられているような印象を受けました。コネクションがある、即ち自分の周りのコミュニティが優れている、ということはその人自身の能力の高さも意味しています。さらに仕事を紹介してもらえるということは、その人から信頼されている人間であることの裏返しでもあるからです。

アメリカン大学の学生と話していた際、ワシントン D.C. には非常に特殊な空気がある、という話がありました。ニューヨークでは金曜日の仕事後に立ち寄るバーやパブで初対面の人と話すと、話題はその日の野球の試合や近所の出来事で盛り上がるけれども、ワシントン D.C. ではまず「お仕事は何をされていますか」から始まるのだ、とのことでした。本来オフの時間でもコネクションづくりを怠らないワシントン D.C. の人達の姿勢を皮肉った言葉でしたが、そうやって場所や時間を問わず自分のネットワークを広げて自分を売り込む姿勢が、自分が仕事をしたい分野や職場に身を置くために重要であることを彼らもよく分かっており、皮肉は彼ら自身にも向けられているように感じました。

総じて、現地の大学生や職員の方の話から、自分の分野における強いコネクションを持つということは、自分の専門と同じくらい大切な能力なのだというを実感しました。早速今回プログラムで出会った人たちとのつながりも、大切にしようと思います。

以上、プログラムを通して国際機関で自分の分野において独自の研究や仕事を行うために必要だと思った能力や素質について述べました。高い専門性や職場に対する柔軟性、さらに強いコネクションと、なかなか先は長く、険しいというのがプログラムを終えての率直な感想です。しかし、普通であれば小学生の将来の夢の作文に登場しそうな『自分にしかできない方法で世界に貢献したい』という理想のキャリア像を自分なりに実現できそうな方法が見えて、さらにそれを実現できるかもしれない機会を今自分が持っていることは非常にありがたく、怯んでしまうのはもったいないと思っています。

現在私は卒業論文に向けて、関連する論文や計量経済の勉強をしていますが、目標としているイギリスの大学院に入り、さらに専門を磨いていくためにも、学士最後の一年間は卒論のための勉強に専念しようと思います。プログラムから帰国し、私のキャリア・デベロップメントは、既に始まっています。



V. 国際機関・多文化環境で働く能力について

Skills for Working at International Organizations

Sakai Ando (Master's Student, Graduate School of Economics)

In this essay, I discuss what skills I think are important in working at international organizations such as the World Bank, the National Institute of Health (NIH), and NASA. Although I try to abstract what they have in common, readers might want to take it into account that my interest is mostly in the World Bank.

Specialization

Specialization is absolutely the most important skill; every staff member I have met in international organizations has his or her own specialization at a high level. Many websites that give advice on how to work at international organizations seem to prefer not to emphasize this point, perhaps because they think readers take this skill for granted. In my opinion, the importance of specialization cannot be emphasized enough.

Many international organizations require applicants to be master's degree holders. What must be remembered is that meeting the application requirement is a far cry from meeting the sufficient condition for passing the recruitment process. Indeed, my guess is that, even if the requirement is raised to Ph.D. holders, the result of their recruitment will remain almost unchanged because individuals who currently get a position usually have a doctoral degree. Most master's degree holders may understand the difference between master's degrees and doctoral degrees; for faculty members, educating master's students is nearly equal to providing an education service for customers, while teaching doctoral students is to bring up their own successors. So there is a huge discrepancy in the level of specialization, and therefore, in order to compete with other applicants, a Ph.D. seems to be essential, especially as more people are expected to hold a Ph.D. in the near future.

Languages

The linguistic hurdles are also very high. One needs to be able to logically persuade colleagues, make polite greetings in diplomatic situations, read and write reports very fast, and hopefully make jokes very often, all in English. One also needs such skills in a language other than Japanese, because it is not one of the official languages in most international organizations. Chinese, French, or Spanish are required depending on where an international organization wants to operate. In this sense, Japanese applicants have a linguistic disadvantage.

The good news I can deliver is that pronunciation comes second. International organizations do not require their staff to be bilingual or trilingual native speakers. Being good enough to speak logically and humorously is good enough.

Imperturbability

I do not have any idea whether my usage of the word “imperturbability” is appropriate or not, but what I mean is “you are not surprised at what you have not seen.” For instance, when you see somebody comes with a Ferrari, the ideal response is (1) to recall that you know Dr. Ueno possesses more than 100 Ferrari’s, and (2) to say “Hi, you have a good car. What do you like about it?” rather than simply being appalled and starting to watch him in awe.

In a diplomatic situation or daily business scene, other’s CVs may look much more impressive than yours, but being unsettled does not improve any odds. As long as you are polite, you do not have to be worried about how big the other person is. You can respectfully ask them to explain if you cannot understand what he or she is saying. I believe this is what people with confidence in themselves usually do, and what people working at international organizations are supposed to do.

It is not likely that ordinary students who have lived ordinary lives can do this. In order to overcome or prevent the feeling of being overwhelmed, one has to get accustomed to being overwhelmed, perhaps by travelling to, say, large-scale places, meeting with large-scale people, or attending leadership programs such as the Kyoto-D.C. program.

Sociability

The final skill is communication skills. I do not intend to say “Let’s make as many friends as possible.” Surface friendliness is OK. At least, you should be nice to people by lavishly giving and returning smiles. The concrete method to show sociability can differ from person to person. As for my own sociability or guidelines for communication, I have a belief that all people on the earth, regardless of religion or ethnicity, can understand and prefer logic and jokes.

The more international the environments get to be, the more frequently communications seems to be based on these two communication tools. This law seems to dominate international organizations. It is natural to expect that all applicants have logic because they have gone through higher education. Jokes, however, are less obvious; therefore, this skill seems to be critical in promotion. Director-level staff I have met are invariably good at warming up meetings and gatherings. It is understandable that sociability counts towards promotion because managerial tasks involve connecting people and helping them reach compromises rather than precisely reporting the details of projects.

Self-analysis

From now on, I want to briefly give a self-analysis regarding the above four skills. First of all, I lack specialization. I currently only hold a master's degree in economics. No matter for which international organization I apply, a Ph.D. is a must to get an economist position. This is why I am going to pursue a Ph.D. in the U.S. from fall 2012.

Second, my language skills are not good enough. As for English, I feel I have problems in speaking and writing. In particular, I want to improve my writing skills to be able to convey complex logic accurately and concisely. Engaging in academic discussions and writing academic papers should be good training. As for another language, I fortunately have basic skills in Chinese. Hence, all I have to study for the next 5 years is to concentrate on the Ph.D. program.

The third skill, imperturbability, is what I learned most on the Kyoto-DC program. I had not met with the top economists in the World Bank or scientists in NASA. I had not seen modern opera, tea ceremony, or a private Ferrari factory. Nor had I lived in a big house with a chef, a swimming pool, and a music room. The Kyoto-DC program showed me all of them, and helped me build up the mental leeway to see things behind the surfaces. Now I am confident that I can dispassionately talk with top economists and appreciate millionaire's tastes and their lifestyles.

Although there are a lot of leadership programs in the world, the Kyoto-DC program might be the best for cultivating the third skill. Since the third skill is different from the first and second ones, which requires help from current successful leaders or their friends, I really thank all the people concerned with this program and recommend all the future students to apply for this unique opportunity.

Finally, I'd like to discuss my own sociability. I was born in China and brought up in Japan. My junior high school was a purely Japanese environment, while my high school was highly international. During my undergraduate days, I lived in a dormitory for international students. I think all these experiences contributed to my sociability and helped me develop my current policy on how to communicate with unknown people with unknown backgrounds. It is to talk logically and exploit the opportunity of joking. Sometimes the environment and people around me are exclusive, and sometimes they are too intrusive or too demanding, but these two tools, logics and jokes, have never failed so far. I believe that they are the passport in the next era.

The Abilities Required in a Globalizing Society

Hironori Taniguchi (Master's Student, Graduate School of Biostudies)

Nowadays in Japan, we often hear the word “globalization”. To tell the truth, I do not know what exactly globalization means, nor did I even think about working for international organizations before joining “The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations”. In this program, I met so many people who have strong minds and pursue their own goals. They all have their own philosophy toward their way of working and living. That experience made me interested in working in an international institution with people with various backgrounds. However, in a community with many talented people from all around the world, it is not so easy to keep working just as I like. In such a community, I have to be recognized by other people with whom I work. I have to show what I can do and how I will be useful for the group to which I belong. I have to be an appealing person with required abilities. This leads me to think about what abilities are essential to succeed in a globalizing society. Although there are many important abilities, I strongly feel that expressing myself in English, having specialization, analyzing my advantages, and understanding cultural differences are important to succeed in a globalizing society.

In the first place, expressing myself in English is one of the most important and indispensable abilities. What I can do by myself is very small; therefore, I need other people's help or cooperation. As far as working with people of different nationalities in a cooperative way, I need to convey precisely what I want to do and make people understand my purpose. If I do not have enough ability to express my ideas clearly, nobody will help me. As a result, I will not be able to accomplish my work.

In Japan, even if someone's opinion is unclear, we will manage to guess or understand it without asking many questions. This is because we share similar cultural backgrounds. However, in a globalizing society, people have diverse cultural backgrounds. Misunderstanding among people occurs more easily because of cultural difference. In that situation, people do not understand me if my explanation is not clear. Therefore, saying my opinion clearly is very important to work among the people with various cultural backgrounds. The ability to use English as a communication tool is absolutely essential to deal with people from different cultures. However, in addition to speaking English, I need the ability to express myself precisely to accomplish my work in a globalizing society.

Many other things are needed to succeed in a globalizing society. What I strongly feel through this program is the importance of having specialization. When I visited the World Bank, I was surprised to hear that there are a lot of people from natural science fields. In my imagination, people who work

for the World Bank majored in social sciences in university, such as economics and sociology, but they did not major in natural sciences such as chemistry, biology, and engineering. I imagined that people, who majored in natural sciences, had no post in the World Bank because the World Bank works on social problems such as poverty from the economic point of view. However, I learned that people from both fields are working together in the World Bank. Once I came to think about the reason why the World Bank needs the people from natural science fields, the answer was very simple. The World Bank works on very complicated problems, which vary from natural sciences to social sciences. Many people with specialized knowledge and skills from various fields are necessary for solving the problems. I realized that if I have specialization, I will be needed by the organizations or companies, even if they seem unrelated to my specialization. However, if I don't have specialization, I will be easily replaced by another person. I cannot say what kind of specialization is needed now and will be needed in the future, but having any specialization is definitely necessary to keep on working in a globalizing society.

In a community with many talented people from all around the world, it is very important to be recognized by others. In order to be recognized by others, I have to show effectively what kind of advantages I have. Advantages can be knowledge, experiences, and techniques that other people do not have. It is sometimes easy to describe advantages, but sometimes it is not. Therefore, it is very important to make it clear what I can do and what I cannot do. If I understand my advantages properly and show them effectively, somebody will recognize me as a competent person.

Analyzing my advantages is also useful to know how I can work for the group to which I belong. Comparing my advantages with others' advantages, I will know what kind of work I should do and what kind of work I should leave to others. Once I recognize my advantages and others' advantages, I will respect them easily because I know what I can do and what they can do. It is very important to cooperate with other people for the purpose of accomplishing work. I should ask other people for help in a task which is difficult to do myself. Asking for help from the appropriate people becomes possible only when I understand my advantages and respect others.

To understand different ways of thinking is also very important. In a globalizing society, people have different backgrounds. What I think is usual for me is sometimes not usual for people from other cultures. There is no right way or wrong way of thinking. Therefore, I should not deny other people's way of thinking, but I need to understand them. I also need to express my way of thinking clearly. I have to make it clear why I think in my way and why they think in their way. By doing so, misunderstanding between me and other people will lessen.

In this program, I met a lot of people working in international organizations. What was most impressive to me is their attitude toward their work and future. They all have their own philosophy

about their work, and told us why and how they think that way. Their words are those of people who have worked in a globalizing society for many years, so those words touched my heart. I realized that skills and abilities are very important to work in a globalizing society with many talented people all around the world, but also philosophy and attitude are important to keep on working in such a hard society. Abilities and skills alone are not enough, but philosophy and attitude alone are not enough either. To be a person who will work and succeed in a globalizing society, the balance of abilities and philosophy is important. I feel that achieving a balance is one of the most difficult things for being a great person.

Through this program, I realized that in order to work in a globalizing society, I need to express myself in English properly, have specialization, analyze my advantages and understand cultural differences. There seem to be so many differences between working in Japanese organizations and working in global organizations. However, the skills and abilities required to work in both Japanese and global organizations are not so different. Organizations want people who have great abilities, philosophy and potential. The different requirements are only languages and the understanding of other cultures. From that point of view, I feel Japanese people have a great potential to be a member of the globalizing society if they speak more English or other languages.

Five Characteristics and Skills Needed for Working in an International Environment

Michiko Namazu (Master's Student, Graduate School of Engineering)

“Competitive” is the word that I heard so many times through this program, especially in international organizations, for example, the World Bank, the National Institute of Health (NIH) and the National Aeronautics and Space Administration (NASA) . It is competitive to get a job in such international organizations, and it is also competitive to survive there. Through visiting those institutions and having discussions there, I found five characteristics and skills, which are important to work in international organizations with competitive atmospheres. The five characteristics and skills are; the characteristic of enjoying the competitiveness, self-confidence, language skills, communication skills, and sense-making skills.

First of all, the most important thing needed to work in international organizations is to enjoy the competitiveness. In my opinion, it depends on a person's character if they can enjoy working in a competitive atmosphere. There is probably no answer to which is better: being able to enjoy

the competitiveness or not; however, I think people, who enjoy the competitiveness and utilize the competitive atmosphere, are more suitable to work in international organizations and have more possibility of success. I am still not sure if I have those characteristics; however, I believe that I have some because I am still interested in working in international organizations even after I visited them and felt directly how competitive the atmosphere was. Just after I visited them, I felt working there was too tough for me; however, I cannot forget the people's faces with confidence in working there. I would like to try to work there in the future if I have a chance.

Secondly, self-confidence is also important. Without self-confidence, no one gives you trust or truly works together with you. In my opinion, in Japanese culture, we tend to focus on negative aspects instead of praising positive aspects. Generally speaking, mentioning our negative aspects and underestimating ourselves is considered as "modest" and "virtuous". Being modest and not forgetting to think about others' feelings are important characteristics of Japanese culture, and I am proud of them. However, as a result, Japanese people often have difficulty having confidence in themselves. Through the discussion with students at American University, I noticed that there was no difference of ability or intelligence between Japanese students and American students. Of course, Japanese students have a disadvantage with regards to language; however, it does not mean that our abilities to think and solve problems are lower than theirs. The thing that Japanese students are missing is just to admire their own abilities and have confidence in themselves.

Thirdly, language skills also play an important role in order to work in international organizations. "At least two United Nations' common languages" is the sentence I heard in the World Bank. I have experience of living in Canada for 8 months as an exchange student, and I have studied English there. My English is good enough to live in any English speaking countries; however, my English skills are not sufficient enough to work in the World Bank. In addition, I cannot speak any other languages except Japanese, which is not included in United Nations' common languages. It means that I am not counted even as applicants for the World Bank. I often hear that "language is just a tool," and usually after those words, these sentences follow: "Language is not the most important thing; therefore, you do not have to worry about it so much". I disagree with the latter part. In my opinion, without the tool, there is no way to show your ability, to express your ideas, or to utilize your skills. Language is the most important and fundamental skill. I will continue studying foreign languages, and I hope Japanese education systems will be improved to let students study foreign languages more easily.

The fourth important skill needed to work in international organizations is communication skills. There is no doubt how important communication skills are in order to work with people with completely different backgrounds. In my opinion, communication skills are strongly related to experience. I naturally do not have an outgoing personality; however, I realized how interesting and

fun it is to relate to others through my experience in communicating with others. The experience told me how fun it is to communicate, and it gave me motivation to communicate more with others. Because of the motivation, I could try harder to communicate with others, and I improved my communication skills through the trials and experience. That is a positive cycle of improving communication skills. Even during the program, I felt that my communication skills were improved because I had opportunities to try and practice them. I often hear that Japanese students lack communication skills, and I agree. I think that lack of experience causes the lack of communication skills. Japanese students have the potential to improve communication skills like students in other countries do; however, Japanese students do not have enough opportunities to utilize the potential.

Realizing your situation is the final skill needed to work for international organizations. When people start anything, the first step should be to know and analyze your situation correctly. This skill is known as sense-making in leadership theory. As I mentioned above, working in international organizations is highly competitive, and workers there need to utilize their talent and ability to survive and succeed in such an environment. In order to maximize those qualities, sense-making is the most important skill. Without knowing what qualities one has, one will never see which abilities have the potential to be improved.

I visited several international organizations through this program, and I found five important skills needed to work in the international organizations. However, I do not think that these skills are needed only for international organizations. Maybe distinguishing working in international organizations from working in domestic organizations is somehow not so meaningful, especially in this rapidly changing and globalized world. I think all five skills: the skill to enjoy competitiveness, self-confidence, language skills, communication skills, and sense-making skills, are also required to work domestic organizations, and will be especially so in coming decades.

Three Key Competencies for Working in a Multicultural Environment

Yutaka Ando (Senior, Faculty of Engineering)

I participated in the Kyoto-DC Program, where I had discussions with American University students and people who worked for an international organization, and who also worked or studied in the United States. From these experiences, I learned about the skills and attitude that are needed to work for an international organization or in a multicultural environment. I would like to introduce three key competencies that I found especially important.

The first key competence needed to work for an international organization or in a multicultural environment is a good command of English and sufficient intelligence. First and foremost, the English language skills are very important. The language spoken in a meeting is, of course, English, and all kinds of documents such as reports and papers are written in English. You may even need to be capable of a language other than English to work for the World Bank, which deals with issues in developing countries where English isn't an official language. If you can't speak English, you can't communicate with people around you even if you have a good opinion. You must avoid facing this kind of situation because the only way to be considered competent in an international organization is to express what you are thinking or feeling. In international organizations, unlike in Japanese organizations, they don't wait to evaluate you, thinking "he may have a good opinion though he keeps silent." It is regrettable if you miss the opportunity to come out on top only because you aren't good at English. However, you should know that English fluency alone is not enough to work for an international organization. Great skills of English just allow you to participate in a race for success. For example, in the World Bank a lecturer spoke about the field he specialized in, and we exchanged our opinions and asked him some questions. The discussion's theme was new and difficult for me. I had to understand what he was saying in a small amount of time, and ask questions that were worth being answered. This needs several skills, including understanding, analyzing, integrating, and synthesizing the information provided in a conversation. You also need to be critical. You should not accept what is said without thinking about it carefully. It is therefore important to be intelligent enough and to have great English language skills.

The second key competence is the ability to rely on others. I had an opportunity to talk with a researcher and an entrepreneur who started a medicine company a few decades ago. He said, "leave what you don't know others, don't try to understand it at the expense of what you must do." These words were very helpful. They relieved me of the burden I had been suffering from. This way of thinking let me know that relying on others is a key competency with two points. First, he said that in order to make a company successful, you need something special that no other company has. Especially in the United States, any academic field or industry which is full of talented people is very competitive. You will not easily be recognized among the many talented people, even though you are good in a field. You can be a winner when you are the first to have come up with a great idea and are noticeably excellent. Relying on others will allow you to spend as much time as possible studying your own field, which will increase your chances of becoming successful. Second, he emphasized that you wouldn't succeed only with strength. There are a lot of things to do when you start a company, many of which are usually difficult and complicated: finance, law, IT, to name a few. These are very important in running a company, but doing all of them on your own would be too much, and would

deprive you of valuable time that otherwise you would have spent doing your own work. You can solve this problem by employing an accountant, a lawyer, and an engineer. In this way, relying on others can increase your chance of becoming a successful person. It is good to know about many fields, but to be successful in the world where a lot of excellent people are struggling to succeed, getting others to do the things that you don't know about or aren't interested in is a key to success.

The last key competence is honesty. Actually, I had very hard time discussing things in this program. Sometimes I was even unable to understand what was said due to my insufficient English language skills. It was, however, impossible for me to improve my skills in a short amount of time. What I could do at the time was to speak when I really wanted my questions to be answered. I spoke honestly, looking the listener in the eye. My questions may not have been understood correctly, but all of the people I asked questions to, including a professor of the American University, answered politely. Because we are Japanese, whose native language is not English and who have different ways of living and thinking, we need to be honest so that people with different languages and cultural backgrounds from us will listen to what we are saying.

Looking back on the days in Washington D.C., I am convinced that I am not yet qualified to work in a multicultural environment. I strongly feel that I must study my chosen area of specialization more, as well as English. Besides that, there are a lot of things I must do in order to achieve my goal. It seems very challenging and overwhelming. However, I don't need to do everything by myself. With the assistance of many people, I can achieve my own goal.

To achieve your goal, it is important that people around you feel that they want to work with you or are willing to help you. In this sense, your success may not depend on what you can do, but it may depend on who you really are. Although English language skills and a wide range of knowledge are necessary, eventually how you stand with your colleagues is important.

I strongly feel that instead of pressuring myself into trying to do things that I don't know about, I need to show my commitment to what I should do now. I also need to see and experience things together with a lot of different people so that I can be a considerate person.

Abilities and Skills Required to Work for International Organizations

Tatsuro Shirakawa (Senior, Faculty of Education)

Before embarking on my writing, I would like to give sincere appreciation to all the lecturers and the Kyoto University alumni in Washington D.C. who devotedly coordinated the Kyoto-DC Global Career

Development Program and welcomed us. It was a very precious and tremendous opportunity to gain hands-on experience at the World Bank, NASA, National Institute of Health (NIH), Center for Global Development (CGD), S&R Foundation and many more. Also, I want to wholeheartedly thank our professors, coordinators, and travel agency for their contribution to the success of this pilot program.

Through this program, I gained a clear image of what it is like to work for international organizations, and learned the kind of requisite abilities and skills in order to work with people with various backgrounds. Since international organizations are culturally and racially diverse workplaces, people are encouraged to be equipped with a variety of skills including leadership, followership, integrity, and cultural understanding. I reckon that there are a lot more important qualities required to be successful, but I am going to review two of the major characteristics that I found are crucial to anyone who intends to dive into the world of international organizations.

The first quality is followership. Please be aware that just because I mention this first, it does not necessarily mean followership is the first priority. However, followership is essential because it functions in conjunction with other abilities and skills. Before discussing the importance of followership, I need to confess that, embarrassingly, I was not very familiar with the term followership or its correct implication. It was pretty silly of me to believe that a docile and subordinate person is a good follower. I am not so sure how many people are well acquainted with the term followership. Presumably, it has often been the case that people are more likely to necessitate leadership, and thus followership is usually sort of valued less. To be frank, I viewed leadership as an ability superior to followership up until recently. It is because I believed that leadership is a comparatively innate quality, which makes it much harder to be attained than followership.

However, I came to see followership in a bit of a different light after participating in this program. I realized that how well a leader navigates and consolidates a group depends on how much team members or followers help him do so. In short, leadership is supplemented by followership to a great extent. A leader ought to manage a group tactfully towards a shared aim in any situation. Apparently, a group leader can rarely fulfill his/her leadership in a group in which followers barely cooperate with him/her. Likewise, a team can never be interactive or synergistic if members are mere subordinate pawns of a leader. Instead, a good follower is a person who works in a contributive and interactive manner in cooperation with other followers to help a leader take initiative to steer an entire group, and yet he/she does not hesitate to speak out and talk over a leader when a group is about to go adrift.

Followership plays a crucial role when it comes to international organizations where people may have different attitudes, ideas and motivations. Understandably, it would be significantly challenging for a leader to keep a team under control. So, what team members are supposed to do is to contribute

to a team. It means sharing opinions, brushing them up, reconciling, and walking toward optimal solutions together in cooperation. As I have noted, followers should be prompted to go against a leader to generate the best outcome.

I mentioned that cultural understanding is also one of the important qualities for anyone working at international organizations. Cultural understanding will get rid of some of the hindrances you may encounter when you talk to people with different backgrounds. The way people speak, reason and communicate greatly differ from one country to another. As a matter of fact, it is well known that people from a certain nation have a specific manner of speaking. For instance, if you know that a person is from a nation where people are inclined to speak fast and loud, you should not hold back when you talk to the person. By making your speaking manner adapted to the situation, you can avoid problematic confusion and misunderstanding. To be teamed up with culturally rich people at international organizations, you need to take cultural difference into consideration.

Cultural understanding is not limited to unique communicative attributes. Since an international organization is a collective body of various nations, workers there are supposedly representatives of their homelands. This suggests that your colleague may not always share the same problem-sets of global issues as yours. That is to say, some may insist there is an urgent need to tackle ongoing global warming, deforestation, desertification and soil erosion, while others are desperate to come up with a solution for the catastrophic financial crisis. Similarly, if a person is assigned to work for the reduction of CO₂ gas emission, he/she is very much advised to set a feasible goal for his/her home country to achieve. Cultural understanding is not limited to communicative attributes. It also entails understanding of your colleagues' motivation to work for international organizations.

Followership and cultural understanding are two qualities that I found very valuable. But, again, I want you to keep in mind that there are other advantageous abilities and skills with which you can arm yourself.

Finally, I want to conclude my post-program report with a word of encouragement for the prospective participants in the Kyoto-DC Global Career Development Program. It was a sheer coincidence that I heard about the program and got selected a participant. Now I can confirm that this is an absolutely fabulous program which is worth applying for. Not only those who are seeking a career in an international organization, but any motivated student should come to check this out. I can assure you that partaking in this program will undoubtedly open your eyes.

Perquisites for Working in International Organizations

Nanaho Yamanaka (Junior, Faculty of Economics)

What are the perquisites for working in international organizations? Based on my experiences from the Kyoto-DC Global Career Development Program, I would say that “competitiveness”, “flexibility”, and “connection” are the three essential skills.

Firstly, it goes without saying that being the most competitive in your own field is crucial for working in major international organizations like the World Bank. As these organizations recruit workers on a global scale based solely on merit, so in order to shine among the tens of thousands of talents, you need to have a certain field in which you are confident that you exceed the others, based on your work experiences and academic degree. The workers in the World Bank, NASA, and other institutions we visited usually had a master’s degree, if not a doctoral degree, in addition to the abundant work experience in their own profession. They were people who have undergone rigorous training in their fields, and they could prove themselves through practice.

One of the workers in the World Bank who had been associated with recruiting future executives mentioned that “What can you do for us?” would be a typical question firstly asked in a highly competitive organization like the World Bank, and that you need to have a very convincing answer. As a junior undergraduate student, I understood that I still have a long way in to go in building my profession, but I was fortunate to be given a clear image of what I should aim for in my career after graduation: I need to find the field where I can excel and put myself in an environment where I can be thoroughly trained.

“Flexibility” is also needed due to the liquidity of the employment in international organizations. The employment situation of the World Bank works differently from Japanese firms in many ways. Unlike Japanese firms where workers would usually stay in the same organization for a long period, if not their entire lives, workers in international organizations move quite freely and frequently between different organizations and sectors. Workers would change their workplaces from time to time based on their interests and the kinds of training they want to take. This is no place for those who prefer to lead a stable career within one sector or organization.

Initially, I wasn’t really inclined to working in the private sector, but what I found interesting in Washington D.C. was that pursuing a certain field in different sectors, workplaces or research institutions is regarded an advantage because it enables you to take various approaches in solving problems. While visiting the Center of Global Development, which is a Washington-based NGO working on global development, I heard a conversation between two workers talking about what jobs

they would like to pursue after their current positions, which confirmed in this view.

Also, in the context of working in public sectors which was my initial interest, experience in the private sector is helpful in many ways. I had a chance to talk with a World Bank worker who had worked long-term in an investment bank before her current position, and it was apparent that the experience in working in the investment bank enabled her to provide advice on improving the efficiency of the World Bank's operations from a more practical perspective. At Sucampo Pharmaceuticals which is a bio venture established by Dr. Ueno who is a supporter of the program, I found that the process of deciding the allocation of investments for medical research could be applied to the context of development assistance allocation (which is my field of interest) to a great extent, and there is a lot to learn from these core techniques.

From such experiences I am now able to regard work in the private sector as an opportunity to enhance my skills and effectiveness in working in the public sector, and contrary to my initial views, I'm interested in working in the private sector at some point in my career.

Last but not least, having the right and strong connections in your field is an efficient shortcut to acquiring jobs in international organizations. Making connections in the field is crucial, and it seemed that the majority of workers actually regard such short cuts as the regular entrance. In the example of the World Bank, the limited announcements of job vacancies give you the impression that the employment opportunities of the organization are quite narrow. However, as long as you expose yourself as well as your talents to the community of your field, preferably to those belonging to the institutions you are interested in, you may find a chance to be introduced to a position through them.

This is not my assumption, as some of the workers told us how they made efforts in networking and eventually acquired the positions they currently have. Although competitiveness in your own field is a must, knowing the right people is equally, if not more, important. In contrast to the Japanese context where the term "connections" may have a negative connotation, having many advantageous connections with competitive people is seen as the proof of your own competitiveness, and it also means that you are a trustworthy person. I would like to bear this in mind as I seek opportunities in my career.

I would like to further pursue my career, utilizing the lessons learnt from participation in this great program. On the outset, as I am still a junior in my bachelor's degree program, I will have to work on building my own field of research and work. I have a long way to go, but I am starting with my undergraduate thesis. I will make an effort in it to have a clearer vision of my field, so as to start career development path.

編集後記

昨夏にグローバル人材の育成を目的とした「The Kyoto-DC Global Career Development Program for International Organizations」プログラムを立ち上げ、2012年2~3月に実施し無事終了することができました。本プログラムの企画・実施にあたって、S&R財団の久能祐子先生、上野隆司先生、京都大学同窓会ワシントン支部京大会の村垣孝会長、ワシントン在住の京大卒業生の皆様、その他本当に多くの方々からご支援、ご尽力を頂きました。本プログラムの重要な意義のひとつは、「京大（卒業）生による（現役）京大生のため」のグローバル人材育成プログラムの誕生だと言えるのではないのでしょうか。改めて京大卒業生の皆さまにご尽力頂いたことに感謝申し上げるとともに、今後とも変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げます。

今回パイロットとして始まったこのプログラムは、世界を舞台に活躍する専門家や研究者との交流と対話を通じ、多角的な視野を育み、グローバルな知識社会に必要な能力とリーダーシップについて考えを深めることを重視しました。第一回目のプログラム参加者は多くの問いを持ち、議論を好み、そして夢や信念を語る頼もしい学生諸君でした。彼らの今後の活躍を大いに期待するとともに、いつの日かこのプログラムの次世代後輩と交流し、活発な対話を持ってくれることを期待します。今後このプログラムが世代を越えた京大ネットワークに支えられて一層の発展を遂げていくことを祈念します。

(渡部由紀)

米国短期留学プログラム
The Kyoto-DC Global Career Development Program
for International Organizations
2011年度 実施報告書

2012年（平成24年）6月発行
編集 京都大学国際交流推進機構
発行 京都大学国際交流推進機構
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-2543

印刷 株式会社 田中プリント
TEL 075-343-0006

